

論
説

一二世紀後半イングランドにおける両剣論

苑 田 亜 矢

目次

はじめに

第一節 対立の時期

第二節 教皇ゲラシウス一世の皇帝アナスタシウス一世宛書翰と『グラーツィアース教令集』

第三節 カンタベリー大司教トマス・ベケットとロンドン司教ギルバート・フォリオットの両剣論

おわりに

はじめに

『両剣論を、『オクスフォード中世事典』は次のように説明している。すなわち、「両剣論という神学的・政治学的理論は、『司祭の聖なる権威と王の権力』という別個ではあるが同格の二つの権力についてのゲラシウスの理論の解釈的補強として理解されうる」と。^①『両剣論』については、我が国においても研究や紹介があるので、ここでは、本稿における議論に必要な限度で、簡潔に解説しておきたい。

『オクスフォード中世事典』の説明にある「ゲラシウスの理論」とは、四九四年の皇帝アナスタシウス一世宛書翰の中で教皇ゲラシウス一世が述べた内容を指している（本書翰を、以下では「ゲラシウス書翰」と略記）。その書翰には「神聖なる皇帝よ、確かに、主としてこの世を統治するものが二つあります。それは司祭の聖なる権威と王の権力です」と書かれている。^②「ゲラシウス書翰」におけるこの記述に対しては、様々な解釈が試みられ、教会権力と世俗権力との関係が、様々に論じられることとなる。一一世紀には、ペトルス・ダミアニ（一〇七二年没）が初めて、教会権力と世俗権力を、聖書の中の一節にある剣になぞらえたといわれている。^③聖書の中の一節とは、『ルカによる福音書』一二、三八にある「そこで彼らが、『主よ、剣なら、このとおりここに二振りあります』と言うと、イエスは、『それでよい』と言われた。」のことである。かくして中世ヨーロッパには、「ゲラシウス書翰」を出発点として、教会権力と世俗権力との関係を様々に論じる『両剣論』（または『両権論』）が現れることとなった。^④

様々な『両剣論』が現れるとはいえ、『両剣論』の特徴は、おおまかには次のように二つに分けて説明されることが多い。

すなわち、聖俗両権力の並置性と相互協調性を主張する聖俗相互協調型の両剣論と、世俗権力に対する教会権力の優位性を説く教会優位型の両剣論である。ゲラシウス一世の立場は前者であり、後者は一三世紀に主張されるようになるという。

ところで、一二世紀後半のイングランドで生じた有名なベケット論争は、イングランド王国のチャンセラーだったトマス・ベケットが、一一六二年にカンタベリ大司教に登位してから一一七〇年に殺害されるまで、イングランド国王ヘンリ二世（在位一一五四—八九九）と争った事件を指すが、その争いは教会権力と世俗権力の争いだったと表現することもできる。⁶ それにも拘わらず、この論争に関する数多くの研究の中に、当時のイングランドにおける両剣論を対象としたモノグラフは、意外なことに見あたらない。そこで、本稿では、この論争の当事者に焦点を当て、彼ら自身の書翰の中に登場する両剣論を検討することにより、⁷ 教会権力と世俗権力の関係はどうあるべきだと論争当事者達が考えていたのかを明らかにしたい。これを明らかにすることは、論争当事者達があるべき秩序をどのような姿に描いていたのかを解明することでもある。本稿では、その点の解明に関連すると思われる彼らの平和観についても触れることとする。その上で、大司教側と国王側との考えがどのように対立していたのかを提示したい。

論争当事者として取り上げなければならないのは、上述のトマス・ベケットとヘンリ二世である。両者の関係が悪化し始める一一六二年から、トマスがカンタベリ大聖堂内で殺害される一一七〇年までの間には、トマスから国王、教皇、枢機卿、そしてイングランド司教達等に宛てられた数多くの書翰が残存している。トマスの両剣論が展開されている書翰のうちの二通は国王に宛てられたものである。それらは、「デシデリオ・デシデラーヴィ」書翰と「エクスペクタンス・エクスペクターヴィ」書翰⁸である。

他方、論争期間中にヘンリ二世からトマスに宛てられた書翰は見あたらない。ヘンリ二世について研究したワレンは、「ヘンリ〔二世〕は、イデオロギー的論争に引き込まれることを断固として拒絶した。彼は、ベケットの書翰に回答しなかった」⁽¹⁰⁾と述べている。このため、ヘンリ二世の考えを彼のトマス宛書翰の中に求めることはできないが、ヘンリ二世の考えを、ロンドン司教ギルバート・フォリオット（在位一一六三―一八七年）のトマス宛書翰の中に求めることは許されるだろう。というのも、ギルバートは、トマスと対抗関係にあったイングランドの司教達の中の代表的人物であつたと同時に、ヘンリ二世を支持していた人物であつたといわれているからである。⁽¹¹⁾確かに、ベケット論争が最も激しくなる時期とされている一一六六年に、ギルバートがトマスに宛てて書いた「マルチプリケム・ノービース」書翰⁽¹²⁾からは、ギルバートとトマスの激しい対立やギルバートによる国王支持の姿勢を読みとることができる。ギルバートの両剣論が展開されているのも、まさにこの書翰である。この書翰には、ギルバートの平和観も示されており、トマスの平和観が表れている「フラテルニターティス・ヴェストレ」書翰と比較することで、両者の対立点がより明確になるだろう。トマスが事実上ギルバートに宛てた「フラテルニターティス・ヴェストレ」書翰は、「マルチプリケム・ノービース」書翰が書かれる原因となつた書翰とされている。⁽¹³⁾

以上の状況を踏まえ、本稿では、主としてトマスとギルバートの両剣論について考察する。しかし、その考察の前提として、第一に、論争関係者の書翰の分析に基づいて、トマスとギルバートがいつ頃から対立するようになったのかを明らかにしておきたい（第一節）。それは、両剣論が展開されているトマスとギルバートの書翰が、両者の対立期に発せられたものであることを確認するためでもある。第二に、トマスとギルバートの両剣論の土台となつたともいえる「ゲラシウス書翰」と『グラティアーヌス教令集』（以下、『教令集』と略記）の中の関係法文を検討する（第二節）。その上で、トマスとギルバートの両剣論を検討し、平和観にも触れたい（第三節）。その際、教

皇アレクサンデル三世（在位一一五九―八一年）の考えにも言及することとする。

第一節 対立の時期

一 幾つかの可能性

トマスとギルバートの対立の起点として従来から注目されてきたのは、一一六二年と一一六三年である。一一六二年は、トマスがカンタベリ大司教に選出され、聖別を受けた年である。⁽¹⁴⁾確かにギルバートは、一一六六年後半の「ムルティプリケム・ノービース」書翰と一一七三年五月の「ヴェストレ・ドムネ」書翰の中で、トマスからの次のような非難に、強く反論している。⁽¹⁵⁾その非難とは、ギルバートはカンタベリ大司教となる野望をもっていたとか、トマスの大司教登位に反対していたとかいうものであり、一一六六年七月初めの「ミランドウム・エト・ヴェヘメントル」書翰の中で述べられている。⁽¹⁶⁾このようなトマスとギルバートのやりとりから、両者の間に大司教位をめぐるある種の対立が存在したことは間違いない。しかし、この点での非難がトマスからギルバートに向けられたのが、書翰の発給年から考えて一一六六年だったとすると、両者に対立が生じたのは、トマスが大司教となった一一六二年ではなかった可能性がある。

他方、一一六三年は、ギルバートがヘレフォードの司教座からロンドンの司教座へ移動した年である。⁽¹⁷⁾この移動に際して、トマスは、大司教への忠誠の誓いの更新をギルバートに求めているが、ギルバートはこれを拒否してい

る。⁽¹⁸⁾大司教への忠誠の誓いの更新という点に両者の対立の原因があったとするなら、一一六三年が両者の対立の起点ということになる。⁽¹⁹⁾しかし、ギルバートがロンドン司教になることは、教皇、国王、さらにはトマスの希望だったことを、当時の彼ら自身によるそれぞれの書翰から読みとることができる。⁽²⁰⁾また、ロンドン司教の聖別式に出席できないことをトマスがギルバートに詫びていると解することができる書翰もある。⁽²¹⁾一一六三年も両者の対立の起点ではないのではないか。⁽²²⁾

それでは、一一六三年より後の時期で、トマスがフランスでの亡命生活に入る一一六四年一月二九日までの間の両者の関係はどうだろうか。⁽²³⁾この間に発せられたギルバートの書翰を確認すると、トマスを名宛人とするものは一通が残るのみである。⁽²⁴⁾しかし、教会裁判の訴訟手続に関する内容を内容とするこの書翰は、論争とは関係がない。他方、同期間に発せられたトマスの書翰を確認すると、教皇宛書翰は二通あるが、⁽²⁵⁾ギルバート宛と国王宛は管見の限らない。

さらに、トマスが亡命生活に入った後の時期で、前述の「マルチプリケム・ノービス」書翰が発せられる一一六六年後半の直前までの時期を対象に、両者の書翰を、彼らと国王ないし教皇との間の書翰も視野に入れて、検討してみたい。この期間には、以下の五通が残存している。

一通目は、一一六四年一月二九日頃のトマスの教皇宛書翰である。⁽²⁶⁾トマスの文書庫に由来する手書本は草稿段階のものだが、これは、ノーサムプトン国王評議会での事件についてのトマスによる教皇への上訴状である。⁽²⁷⁾この書翰の中でトマスは、イングランドの司教達を非難の対象としてはいるものの、ギルバートを名指しで攻撃しているわけではない。

二通目は、トマスによる先の上訴についての教皇の回答書であり、⁽²⁸⁾一一六四年一月から一一六五年八月の間に

発せられたものである。この書翰の中で教皇は、ノーサムプトン国王評議会でのトマスに対する判決は無効であると述べている。

三通目は、一一六五年に教皇からギルバートに宛てられた書翰である。⁽²⁹⁾ これは教皇が国王への取りなしをギルバートに指示したものである。

そして四通目は、前述の取りなしの依頼に関するギルバートから教皇への報告書である。⁽³⁰⁾ 一一六五年七月末から八月の間に発せられたものである。これには、まず、教皇によって依頼された以下の四点が、ギルバートによって実際に国王に提示されたことが説明されている。その四点とは、国王が、真実と正義の道に帰ること、ローマ教会を尊重してローマ教会への上訴を禁じないこと、カンタベリ大司教を帰還させること、そしてイングランド王国内の教会と教会人に圧力をかけないことである。これらに続いて、次に述べられるのは、この四点それぞれに対する国王からの回答——これは上述の四点それぞれに正確に対応する回答とはなっていない——である。すなわち、国王はローマ教会を尊重しているということ、上訴に関しては国王の権威と命令によって自らの権利を得ることができるかどうかを試さない限りいかなる聖職者も出国してはならないということは国王の名誉と義務に属すること⁽³¹⁾、神聖ローマ皇帝に関しては彼が教皇によって破門されたことは知らなかったということ、そして大司教を追放してはいないということ、以上が国王の回答として教皇に報告されている。ここからは、教皇が、国王とトマスの対立を和解に導くための仲介役として、ギルバートを頼りにしていることが窺える。

五通目は、一一六六年初めにトマスがギルバートへ宛てた書翰「リケット・ティビ」である。⁽³²⁾ この書翰では、トマスがギルバートに、誤りを正すようにと穏やかに忠告している。この時点では、トマスはまだ、「ギルバートからの援助に望みを抱いている」⁽³³⁾ ようである。

以上から、一一六六年初めの「リケット・ティビ」までの書翰を辿る限り、それまでの時期に、トマスとギルバートの間に激しい対立があったことを読みとることは難しい。このため、以下では、一一六六年初めの「リケット・ティビ」書翰と一一六六年後半の「マルチプリケム・ノービース」書翰との間に何か決定的な出来事が起こったのかどうかを確認することにした。

二 「リケット・ティビ」書翰と「マルチプリケム・ノービース」書翰の間の事件

トマスは、一一六六年六月一二日に、以下の人々に対する破門と聖務停止をヴェスレイで宣告している。すなわち、シスマを支持したとしてジョン・オヴ・オクスフォードとリチャード・イルチエスタを、一一六四年のクラレンドン法（以下、年号を付さずにクラレンドン法と略記）を起草した張本人としてリチャード・ドウ・ルーシーとジョスリン・ドウ・バリオルを、そしてカンタベリー教会の財産を侵奪したとしてラナルフ・ドウ・ベックとヒュー・オヴ・セントクレアとトマス・フィッツバーナードを破門すると宣告し、ジョスリン・オヴ・ソールズベリを聖務停止にすると宣告した。この破門と聖務停止については、それを告知する書翰⁽³⁵⁾やそれを周知させるための複数の書翰が残存している。後者のうち、一一六六年六月一二日のギルバートおよびカンタベリー大司教管区の全司教宛書翰「フラトレス・メイ」⁽³⁶⁾では、国王への聖務停止ないし破門の予告も行なわれているが、注目したいのは、この書翰の中でトマスがジョン・オヴ・オクスフォード達の破門等の周知を、ギルバートに依頼しているということである。トマスはまだ、イングランドにおける教会行政についてギルバートを頼りにしているようだ。

しかし、一一六六年五月末ないし六月初めに、ある書翰をトマスが国王宛に発すると、トマスとギルバートの関係は明らかに対立の方向に動き始めることが判明する。その国王宛書翰とは、のちにギルバートによって「脅迫

(minae / comminatorium)⁽³⁷⁾」と表現されることになる「デシデリオ・デシデラーヴィ」書翰⁽³⁸⁾のことである。トマスはこの書翰を挨拶文なしで書き始めており、両剣論を展開した直後で、クラレンドン法の定めに言及しながら、国王が行なうことのできないことを列挙している。すなわち、「あなた〔王〕が、誰かを破門することや解くことを司教に命じたり、聖職者を世俗の審理に引き渡したり、教会と十分の一税に関する裁判を行なったり、司教が誠実と誓約違反の事件を取り扱うことを禁じたりすることはできないのです。そしてこの種の多くのこと〔を規定することはできないのです〕。これらは、あなたが「祖父の慣習」と呼んでいるところのあなたの慣習〔クラレンドン法〕に書かれています」と。さらには、国王に対して、警告に耳を傾けるよう、シスマを支持しないよう、カンタベリー教会の財産を奪おうとすることなく返還するよう、そしてカンタベリーへの自らの帰還を実現させるよう、迫っている。そして末尾で、以上のことをなさねば「神の厳しさと復讐を受けることになる」と⁽⁴⁰⁾「脅迫」している。

トマスのこの動きに対してギルバート達がとった行動は、教皇への上訴である。ギルバートは、一一六六年六月二四日頃に「カンタベリー大司教管区の全司教と全聖職者」の名の下で書いた「クエ・ヴェストロ・パテル」書翰⁽⁴¹⁾によって、この上訴についてトマスに知らせしており、上訴の理由を説明する中で、聖務停止ないし破門の宣告がまさに発せられようと言わねばかりにトマスが国王を「脅迫」したことを強く非難し、ソールズベリー司教ジョスリンの聖務停止とソールズベリーの聖堂参事会長ジョン・オヴ・オクスフォードの破門にも異議を唱えている。そしてこの書翰に対するトマスからの返書の一つである「フラテルニタティス・ヴェストレ」における主要な論点の中の一つを構成しているのが、ギルバート達が行なったこの上訴の適法性である。⁽⁴²⁾

以上から考えるなら、トマスとギルバートの明白な対立の起点は、一一六六年の六月とみることができよう。このように考えられるとすれば、一一六四年に「王国の慣習」が一六条から成るクラレンドン法として成文化され、

国王とトマスの関係がより悪化し始めたときとされる時期には、まだ、トマスとギルバートは対立関係にはなかったということになる。念のため、次に、トマスとギルバートのクラレンドン法に対する態度が極めて大きく異なっていたわけではない点を確認しておきたい。

三 一六四年のクラレンドン法に対するトマスとギルバートの態度

トマスのクラレンドン法に対する態度は言うまでもない。前述の「フラトレス・メイ」書翰⁽¹³⁾において、トマスは、クラレンドン法を「慣習 (Consuetudines)」ではなく「不正 (prauiates)」と表現しているのみならず、同書翰の中で、クラレンドン法が含んでいる「不正」とは具体的に何なのかについても言及している。

王の許可がなければ如何なる事件についても使徒の座へ上訴してはならないこと。王の許可がなければ大司教も司教も出国し、主君たる教皇の召喚に応じてはならないこと。王の許可がなければ、司教は、王の直接授封者を誰も破門してはならず、また彼ら自身の土地であれ、その役人達の土地であれ、聖務停止のもとに置いてはならないこと。司教は、偽証や誓約違反の者を誰も罰してはならないこと。聖職者が世俗の裁判に引き渡されること。王であれ、それ以外の者であれ、俗人は、教会と十分の一税に関する事件を審理することが⁽¹⁵⁾できること。そしてこの種のこと。

ここで「不正」として取り上げられていることは、それぞれ順番に、クラレンドン法第八条、第四条、第七条、第一五条、第三条、そしておそらくは第一条を指していると考えられる。⁽¹⁶⁾ただし、十分の一税に関する規定はクラ

レンドン法には見あたらない。なお、第八条と第四条を除くほぼ同様の内容は、前述の「デシデリオ・デシデラヴィ」書翰でも取り上げられており、トマスは、第一条、第三条、第七条、第一五条の内容に言及しながら、破門を命ずる権利（第七条）、教会、十分の一税、聖職者、そして誓約に関する裁判権（第一条、第三条、第一五条）を国王は持つていないと述べているとみることができる。⁽⁴⁷⁾

それでは、クラレンドン法に対するギルバートの態度はどうだろうか。各条項に対する彼の見解は、彼のどの書翰の中にも明示されていない。しかし、彼も、クラレンドン法の中には問題のある条項が存在すると考えていたことが、「マルチプリケム・ノービース」書翰⁽⁴⁸⁾の記述から窺える。この書翰の中で、彼は次のように述べている。

この王の威厳の遵守があなた（トマス）とあなたの教会の属司教達から要求された時、それらのうちの幾つかにおいて神の教会の自由が抑圧されると思われたので、私（ギルバート）達は、神の名誉と私達の身分を害さずに遵守されうることを除いて、同意を与えることを拒否したのです。⁽⁴⁹⁾

クラレンドン法を意味する「王の威厳」の中に、「教会の自由」を抑圧するものが幾つかあるとギルバートが述べているということは、クラレンドン法の中には「教会の自由」にとって問題のある条項が存在すると彼も認識していたということである。したがって、トマスもギルバートも、クラレンドン法の中には問題のある条項があると認識していたという点では、一致していたということができよう。

それではトマスとギルバートとの間の対立点はどこにあったのだろうか。両者の対立点について、両剣論という観点から検討を加えたい。しかし、それを検討する前に、両者の両剣論が依拠している「ゲラシウス書翰」と『教

令集』の関係法文を検討しておきたい。

第二節 教皇ゲラシウス一世の皇帝アナスタシウス一世宛書翰と

『グラーツィアーヌス教令集』

一 教皇ゲラシウス一世の皇帝アナスタシウス一世宛書翰

「ゲラシウス書翰」には、次のように書かれている。

〔一〕 神聖なる皇帝よ、確かに、主としてこの世を統治するものが二つあります。それは司祭の聖なる権威と王の権力です。これらのうち、神の裁きにおいて司祭が王自身のために主に向かって釈明しようとすればするだけ、祭司の権威は益々増大します。〔二〕 最も慈悲深い息子よ、実際、あなたは次のことを知っています。すなわち、あなたは威厳によって人類を統治しているとはいえ、しかしあなたは、神の事柄の指導者〔祭司〕に対してひた向きに首を垂れ、そしてあなたの救済の状況を彼ら〔祭司〕に期待しているのだということを。また、あなたは次のことを認識しています。すなわち、天上における秘蹟を手に入れることとその秘蹟を適切に配分することにおいて、あなたは、宗教の秩序に従って、先んじるのではなく、従わされねばならないということ⁵⁰⁾を。〔一二〕〔二二〕は筆者による挿入

ここでゲラシウス一世が述べているのは、人類を統治している皇帝も、「神の事柄 (res divinae)」ないし「秘蹟 (sacramentum)」に関しては、祭司に従うべきであるということであって、いかなる場合も「王の権力 (regalis potestas)」が「司祭の権威 (auctoritas pontificum)」に従うべきであるということではない。また、彼は、二つの権力にはそれぞれの職分があると考えているようである。実際、彼は、別のところで、よりはっきりと次のように述べており、皇帝が「世俗の事柄 (temporalis res)」を担うことも明示している。

キリストは…二つの権力の職務を、各々の活動と別々の権威に従って区別しました。それは、キリスト教徒の皇帝が、永遠の生活のために司祭を必要とし、司祭が、世俗の事柄の推進のために皇帝による統治を利用するためです。⁽⁵¹⁾

以上から、ゲラシウス一世は、聖俗両権力の並置性と相互協調性を主張する聖俗相互協調型の両剣論を主張していると同時に、二つの権力にはそれぞれの職分があると考えていると見なすことができよう。

二 『グラートイアヌス教令集』

一四〇年頃に編纂された『教令集』の中で、両剣論に関係する箇所として注目されてきたのは、第一部第九六分節第九、一〇、一一、一二法文、第二部第二事例第七設問第四一法文、そしてその第四一法文の後に書かれているグラートイアヌスの付言である。

第一部第九六分節第九法文では、「祭司は王と君侯の父であり師であると見なされる⁽⁵²⁾」という標題の後、教皇グ

レゴリウス七世のメッツ司教ヘルマン宛書翰に基づいて、次のように書かれている。

キリストの祭司が、王と君侯と全ての信徒達の父であり師であると思なされることを、誰が疑うことができません。もし「誰かが」、子が父を、弟子が師を、自らに従わせようとするなら、そして不当な義務によって、地上においてだけでなく天上においても彼によつて自らが繋がれたり解かれたりすることができると「誰もが」考えるそのお方を、自らの権力に従わせようとするなら、それは嘆かわしい愚行に属するものと認識されるのではないでしょう⁽³³⁾か。

この法文では、王は祭司に従うべきであると述べられていることになり、教会権力は世俗権力の上位に置かれているといえる。

続く同所第一〇法文では、「聖なる司祭の権威と王の権力がこの世の舵を取っている⁽³⁴⁾」という標題の後、次のように書かれている。

「(一) 神聖なる皇帝よ、確かに、主としてこの世を統治するものが二つあります。それは司祭の聖なる権威と王の権力です。これらのうち、神の裁きにおいて司祭が人間達の王自身のために釈明しようとすればするだけ、祭司の権威は益々増大します。そして少し後で「以下のことを述べています」。(二) したがって、それらの中で、あなた「(皇帝)」は彼ら「(祭司)」の判決に頼らねばならないのであって、彼ら「(祭司)」をあなたの意思に従わせることはできないということを、あなたは認識しています⁽³⁵⁾。∴。(一)「(三)」は筆者による

挿入)

第一〇法文の典拠は、教皇ゲラシウス〔一世〕の皇帝アナスタシウス〔二世〕宛書翰であると、『教令集』では示されているが、前述の「ゲラシウス書翰」と比較してみると、引用部分の後半が異なっていることが分かる。この法文では、「ゲラシウス書翰」における〔二〕以下の文章が削除され、代わりに〔三〕以下の文章が挿入されている。この挿入部分〔三〕は、実は、「ゲラシウス書翰」では、削除部分〔二〕の直後に登場する。⁽⁵⁶⁾「ゲラシウス書翰」のこの改変ヴァージョンは、教皇グレゴリウス七世が一〇八一年にメッツ司教ヘルマンに宛てた書翰の中で引用した「ゲラシウス書翰」の改変ヴァージョンとほぼ同じである。⁽⁵⁷⁾『教令集』の当該法文は、グレゴリウス七世の書翰に引用された「ゲラシウス書翰」の改変ヴァージョンを参考にしたものと考えられており、後述するように、『教令集』に基づいたトマスも改変ヴァージョンに依拠したことになる。改変ヴァージョンに基づいた本法文では、削除部分〔二〕で述べられていたこと、つまり、「神の事柄」ないし「秘蹟」に関しては皇帝も祭司に従うという部分が削除されていることになり、いかなる場合でも皇帝は祭司に従わなければならないという意味になる。したがって、本法文全体では、世俗権力に対する教会権力の優位性が述べられていることになろう。

第一〇法文に続く二つの法文でも、世俗権力に対する教会権力の優位性が述べられている。同所第一一法文では、「皇帝は、司祭に先んじるのではなく、従わねばならない」⁽⁵⁸⁾という標題に、以下のような法文が続いている。

：世俗法やこの世の権力者によってではなく、司祭や祭司によって、キリスト教の聖職者や祭司が叙任されたり、審理されたり、誤りから立ち返って受け入れられたりすることを、全能の神は欲しました。キリスト

教徒の皇帝達は、彼らの統治を教会の指導者〔祭司〕の下に置くべきであつて、上に置くべきではありません⁵⁹。
ん。

また、同所第一二法文では、次のように書かれている。これは、ゲラシウス一世の東方司教宛書翰を典拠とするパレアである。⁶⁰

教会でなければ司祭について決して裁かなかつたこと。主として教会に任じられた司祭なしにそのような者〔司祭〕について判決を下すことは人法に属することではないこと。キリスト教徒の君侯は教会の決定に常に従い、その〔君侯の〕権力を教会の決定の前に置かないこと。君侯は頭を常に司教に下げ、司教の頭に就いて裁かないこと。⁶¹

ところが、第二部第二事例第七設問第四一法文の後に書かれているグラティアーヌスの付言においては、教会権力は世俗権力の上位に置かれているわけではない。

：しかし、以下のことが注目されるべきです。すなわち、この世を統治する人格が二つあります。すなわち、王の人格と祭司の人格です。王が世俗の事柄において上位に立つのと同じように、祭司は神の事柄において上位に立ちます。身体的罰を課すことは王に属し、霊的な罰を与えることは祭司に属します。したがって、ダビデは、王としての塗油により世俗の事柄においては祭司や預言者よりも上位に立ったとしても、彼は神

の事柄においては彼らよりも下位に立ったのです。そのため、王達は預言者と祭司によって塗油され、王達の罪は彼らの献納によって贖われました。⁽⁶²⁾…。

このグラティアーヌスの付言においては、教会権力と世俗権力という二つの独立した権力がそれぞれの職分を持つていることを前提として、祭司は「神の事柄 (causa Dei)」においては上位に立ち、王は「世俗の事柄 (causa seculi)」においては上位に立つとされている。そして「神の事柄」においては王が下位に立つことにも言及がある。

また、この付言が置かれている直前の第二部第二事例第七設問第四一法文は、教皇レオ四世が皇帝ルードヴィヒ〔二世〕に宛てた書翰を典拠としており、「教皇が臣民に対して何か不正に行なったならば、教皇は皇帝の裁判によって修正されることを認める」⁽⁶³⁾という標題に続いて、教皇が皇帝の修正に服する場合があることが述べられている。

私がいかなるかを不十分に行ない、臣民において法の道を正しく保持しなかったとするならば、私はあなたの判決あるいはあなたの派遣した者達の判決によってすべてを修正することを望みます。⁽⁶⁴⁾…。

以上のように、総じて言えば、『教令集』には、教会優位型両剣論にとっても、聖俗相互協調型両剣論にとっても、典拠としての記述がある。

第三節 カンタベリ大司教トマス・ベケットと ロンドン司教ギルバート・フォリオットの両剣論

一 カンタベリ大司教トマス・ベケットの両剣論

トマスが教会権力と世俗権力との関係をどのように考えているのかについて、最もよく伝えられているのが、いずれも国王ヘンリ二世に宛てられた「デシデリオ・デシデラーヴィ」書翰と「エクスペクタンス・エクスペクターヴィ」書翰である。

彼は、一一六六年五月末ないし六月初めの「デシデリオ・デシデラーヴィ」書翰⁽⁶⁵⁾において、次のように書いている。

何故なら、神の教会は、聖職者と民という二つの身分に基づいているからです。使徒たち、教皇、司教、そしてその他の教会の博士たちは聖職者の中にあります。神の教会の管理と統治は、彼らに委ねられたのであり、彼らが、全体を、魂の救済に至らせるために、教会の業務を執り行なうことができます。∴王、君侯、公、伯、そしてその他の権力者たちは、民の中にあります。彼らが、全体を、教会の平和と統一に至らせるために、世俗の業務を執り行なうことができます。そして、王たちがその権力を教会から受け取っており、教会がその権力を王たちからではなくキリストから受け取っているのは確かなのでありますから∴。⁽⁶⁶⁾

ここでは、神の教会は「聖職者 (clerus)」と「民 (populus)」と「二つの身分 (duo ordines)」に基づいており、「聖職者」身分が「教会の業務 (nogotium ecclesiasticum)」を、「民」の身分が「世俗の業務 (nogotium seculare)」を執り行なうことができるのだとして、二つの身分にはそれぞれの職分があるとトマスは述べている。しかし、彼は、二つの身分を並置しているのではなく、「聖職者」を「民」より上位に置いている。「教会がその権力をキリストから受け取り」、「王たちがその権力を教会から受け取っているからである。なお、別の書翰「フラテルニターティス・ヴェストレ」⁽⁶⁷⁾でも、トマスはギルバートに「兄弟よ」と呼びかけて、「王国の法と、教会の法を混同することのないようにしてください。実際、その二つの権力は別物であり、それらのうちの一方は実力と権力を他方から得ているのであります」⁽⁶⁸⁾と述べている。一方とは世俗権力を、他方とは教会権力を指しているであろう。トマスは、教会権力を世俗権力の上位に置いている。

また、一一六六年六月一二日より後に書かれた国王ヘンリ二世宛「エクスペクタンス・エクスペクターヴィ」書翰⁽⁶⁹⁾では、『教令集』からの引用に基づいて、トマスは次のように述べており、総じて言えば、教会権力を世俗権力の上位に置き、教会優位型の両剣論を展開しているといえる。

「一」最も親愛なる王よ、神の教会に配分されるべきものが、この世の権力者ではなく、神の祭司に属することを神は欲し、その権力者がキリスト教徒であるなら、彼らが神の教会の祭司に従うことを神は欲しました。したがって、あなたは、他人の権利や、他人に割り当てられた職務を、自らのものと主張してはいけません。あなたは神——全ての事柄は神によって立てられています——と争ってもいけません。それは、神

の恩恵に対して——あなたはあなたの権力を神から得ているのです——あなたが争っていると見なされないためです。⁽⁷⁰⁾「(二)」「世俗法やこの世の権力者によってではなく、司祭や祭司によって、キリスト教の聖職者が叙任されたり、審理されたりすることを、全能の神は欲しました。キリスト教の王達は、彼らの統治を教会の指導者〔祭司〕の下に置くべきであって、上に置くべきではありません」。⁽⁷¹⁾「(三) 実際、以下のことが書かれています。『教会でなければ祭司について決して裁いてはならないこと、そのような者〔祭司〕について判決を下すことは人法に属することではないこと、キリスト教徒の君侯は教会の決定に常に従い、その〔君侯の〕権力を教会の決定の前に置かないこと、君侯は頭を常に司教に下げ、司教について裁かないこと」。⁽⁷²⁾「(四)」「確かに、主として世界を統治するものが二つあります。それは司祭の聖なる權威と王の権力です。これらのうち、神の裁きにおいて祭司が王自身のために釈明しようとすればするだけ、祭司の權威は益々増大します。確かに、あなた〔王〕は彼ら〔祭司〕の判決に頼らねばならないのであって、彼ら〔祭司〕をあなたの意思に従わせることはできないということをおあなたは認識したはずです。∴」。⁽⁷³⁾「(一) から〔四〕は筆者の挿入」

この引用部分の「(二)」「(三)」「(四)」は『教令集』に依拠して書かれているが、「(一)」が何かに依拠して書かれたのかどうかは明らかではない。「(一)」からは次の二点が確認できる。第一に、前述の「デシデリオ・デシデラーヴィ」書翰で述べられた二つの身分のそれぞれの職分には言及がないが、おそらくはそれを前提として、「教会に配分されるべきもの」は祭司に属しており、世俗権力者が祭司に属する権利や職務を自らのものと主張してはならないとされている。ここでは、祭司に属するものが奪われる場合だけが述べられており、逆の場合については言及がない

点にも注意しておきたい。第二に、本書翰では、「あなた〔王〕」はあなたの権力を神から得ている」と述べられてはいるものの——聖俗相互協調型両剣論にしばしば見られるように——教会権力も世俗権力もともに神に由来するとして二つの権力が並置されているわけではない。世俗権力はもとを辿れば神に由来するものだという一般論を述べて、神の恩恵を尊重するように国王に求めていると考えられる。〔二〕から〔四〕までにかけて引用される『教令集』の第一部第九六分節第一一法文、第一二法文、そして第一〇法文からは、他方、トマスが、世俗権力を教会権力の下位に置いていることが明らかである。特に第一〇法文について確認しておくなら、トマスは、「ゲラシウス書翰」から引用しているとはいえ、それは、改変ヴァージョンの「ゲラシウス書翰」であるということが注意されるべきであろう。

以上の二通の書翰の他にも、一一六六年六月一二日にトマスがギルバートとカンタベリー大司教管区の全司教に宛てた「フラトレス・メイ」書翰⁷¹⁾において、トマスは、祭司は王と君侯の父であり師であると見なされるべきであるとする『教令集』の第一部第九六分節第九法文を引用している。

キリストの祭司が、王と君侯と全ての信徒達の父であり師であると見なされることを、誰が疑うことができましょう。もし「誰かが」、子が父を、弟子が師を、自らに従わせようとするなら、そして不当な義務によって、地上においてだけでなく天上においても彼によつて自らが繋がれたり解かれたりすることができると「誰もが」考えるそのお方を、自らの権力に従わせようとするなら、それは嘆かわしい愚行に属するものと認識されるのではないでしようか。⁷²⁾

さらに、ギルバート宛の「ミランドウム・エト・ヴェヘメンテル」書翰⁽¹⁶⁾において、トマスは次のように述べている。

したがって、私の主君〔ヘンリ二世〕は、あなた〔ギルバート〕が伝えれば、次のことを知り、そして理解するはずです。すなわち、人間のみならず天使の王国において支配するお方は、自らのもとに二つの権力、すなわち君侯と祭司をたてた。一方は地上の権力、他方は霊的な権力である。一方は仕え、他方は支配する。神は一方に権力を与え、他方には敬意が示されることを望んだ。しかし、一方ないし他方から、その権力を奪った者は、神の定めにくることになるのです。⁽¹⁷⁾

最後の一文には「一方ないし他方から、その権力を奪った者は」と書かれているため、「霊的な権力」に属する権力が奪われる場合と、「地上の権力」に属する権力が奪われる場合との相互性が考慮されていると読むこともできる。しかし、最後の一文の直前までの議論で強調されているのは、あくまで、「地上の権力」に対する「霊的な権力」の優位性である。トマスの力点は、教会権力と世俗権力の相互性の考察には置かれていないと考えてよいだろう。

以上のトマスの書翰全てから、概して言えば、世俗権力に対する教会権力の優位性を説く教会優位型の両剣論をトマスは展開していることになる。また、彼は、教会権力と世俗権力がそれぞれの職分を持っているということは認めているとしても、その職分に関する議論の中で強調しているのは、教会権力に属するものを、世俗権力が自分のものであると主張したり、奪ったりしてはならないという点である。

それでは、裁判管轄権に関する教会権力と世俗権力の関係を、トマスはどのように考えているのだろうか。第一節の三で触れたように、「デシデリオ・デシデラーヴィ」書翰において、彼は、クラレンドン法の第一条、第三条、第七条、第十五条の内容に触れ、破門を命ずる権利（第七条）、教会、十分の一税、聖職者、そして誓約に関する裁判権（第一条、第三条、第十五条）を国王は持っていないと述べているとみることができる。

これらの裁判権のうち、聖職者に対する裁判権について、彼は「ミランドウム・エト・ヴェヘメンテル」書翰⁽⁷⁸⁾の中で、次のように述べている。

私達の主君は、自分の裁判官〔祭司〕達を取って裁こうとしてはならないのです。何故なら、天国の鍵は、地上の権力ではなくて、祭司に委ねられているからです。⁽⁷⁹⁾

こう述べた後、さらに、皇帝コンスタンティヌスにまつわる次のような話をトマスは取り上げている。すなわち、司教に関する訴えが皇帝のもとにもたらされた時、皇帝は、「あなた方は、真の神によって立てられた神々であります。行きなさい。そして、あなた方の間であなた方の事件を解決しなさい。何故なら、私達人間が神々を裁くべきではないからです」と述べたという話である。この話にトマスは、次のように続けている。「おお、偉大な皇帝よ。おお、地上において賢明に統治する者よ。他人に属するものを我がものとすることなく、天における永遠の王国に値する者よ」と。ここでは、聖職者に対する裁判権を国王が持たない理由を、トマスは幾つか考えていることが分かる。「天国の鍵」は、「地上の権力」ではなく「祭司」に委ねられているからというのが一つの理由であり、聖職者を裁くということは「人間が神を裁く」ことであり、「他人に属するものを我がものとする」と「だか

らというのが別の理由であろう。換言するなら、聖職者を裁くことは、教会権力の優位性の故に、そして教会権力に属するものを奪うことになるが故に、国王裁判権には含まれないのである。

二 ロンドン司教ギルバート・フォリオットの両剣論

教会権力と世俗権力の関係について述べたギルバートの書翰は多くない。一一六六年後半にトマスに宛てられた「マルチプリケム・ノービース」書翰⁽⁸²⁾には、次のように書かれている。

かくして、一方では祭司の権力という、他方では王の権力という双子の権力は神から由来しているのでありますから、その両方の権力のいずれもある点では他方に優位するということ、またある点では他方から判決を下され得るということを、教父達の權威によって、人々は確証するのであります。そのため、相互に自らに判決を下し、また自らによって判決を下される王達と司祭達のこのような相互関係が、愛のある種の強い絆であり、畏敬の義務であり、他方に対して平和が保持されなければならないという双方にとってのある種の必要性なのであります。⁽⁸³⁾

この書翰で用いられている表現は、「ゲラシウス書翰」のそれと同一ではないが、考え方の基礎は、ゲラシウス一世にあると考えられる。ギルバートが、「祭司の権力」と「王の権力」を「双子の権力 (*gemina potestas*)」と表現するとともに、二つの権力は神に由来すると述べていることから、彼が二つの権力を並置していることが分かるからである。ギルバートは、聖俗相互協調型の両剣論を展開しているとみることができる。

また、二つの権力が「ある点では他方に優位するということ、またある点では他方から判決を下され得る」という説明からは、「ある点」が「神の事柄」や「世俗の事柄」という語で表されているわけではないものの、二つの権力にはそれぞれの職分があることが前提とされていると考え得る。さらに、二つの権力のそれぞれの職分と裁判管轄権とが結びつけて考えられてもいる。「ある点」では、一方は「他方から判決を下され得る」とされているからである。

この引用に続く箇所でも、「マルチプリケム・ノービース」書翰では、職分と裁判管轄権が結びつけて論じられている箇所がある。そこでは、「神に属するもの」と「王のもの」という表現が用いられている。

これらのこと、またこれらよりもさらに深遠なことを考慮して、あなたは使徒が教えているように王を卓越したものとして敬い、また王の正しき判決に服従することによって王を裁判官として承認し、またあなたは王のものを王に確保することによって、神に属するものにおいて王があなたに服従するように、分別をもつてまた用心深く忠告したのであります。⁸⁴

「王のもの」に対して国王は裁判管轄権を有しており、「神に属するもの」に対して司祭は裁判管轄権を有している」と論じているかのごとくである。

これら以外の箇所では、裁判管轄権に関する教会権力と世俗権力の関係を、彼はどのように論じているのだろうか。ギルバートは、「マルチプリケム・ノービース」書翰の中で、大司教の所領の一部をめぐる訴えに関する国王からの召喚に、トマスが応じなかったことを指摘した後、次のように議論している。

彼は、『教令集』中の複数の法文に基づいて、聖職者は世俗裁判官によって裁かれ得ないとされていることを、ひとまず確認している。しかし、それらの法文にも拘わらず、次のことをトマスも認識しているはずだといわんばかりに、トマスの口に次のことを語らせている。次のことは、塗油の故に王は世俗裁判官であるだけでなく教会裁判官でもあること、そして教皇は、自らが臣民に対して何か不正に行なった場合には、皇帝の判決によって修正されることを望んだということである。後者については、『教令集』の第二部第二事例第七設問第四一法文が引用されている。⁽⁸⁵⁾その上で、トマスがそれらのことを認識しているなら、極めて多くの人々とトマスの見解は一致するところがあると、次のように述べている。

もしあなたがこのような考えを持っているとするならば、きわめて多くの人々の見解が次の点ではあなたの分別に合意します。すなわちそれは、秘蹟に対する畏敬の故に、王が調べ王の裁判権行使によって終結せしめるのが当然であると彼等が判断するのはすべての教会の事件と教会人の事件ではなく、彼等が区別する教会の事件と教会人の事件なのである、ということでありま⁽⁸⁶⁾す。

ギルバートは、国王裁判権は、一定の区別が設けられた教会と教会人の事件に及ぶと考えているといえる。それでは、どのような事件に国王裁判権は及ぶと彼は考えているのか。国王裁判権が及ぶ全ての事件をギルバートは数え上げているわけではないが、トマスが関係している訴訟との関係で、上述の教会の所領に関する事件については国王裁判権が及ぶのだと述べている。話を追っておこう。

ギルバートの説明によれば、教会には、神法のみに基づいて所有しているものと、人法に基づいて所有している

ものがあるという。前者には靈的なものと物質的なものがあるが、例えば、聖職者の位階、聖なる身分、それらに關係する權威と權力は靈的なものであり、十分の一税、奉獻物、初穂料は物質的なものにあたる。これらのものは、国王裁判權は及ばない。しかし、教会が人法に基づいて所有しているものがある。それらは人々が寄進によって教会に譲与したものである。實際、王達も財産を教会に寄進している。そのため、教会は王達に対して軍事的な奉仕や土地に付随した奉仕を行なう。以上を考えれば、教会は、一方では神の僕であり、他方では王に対して奉仕する存在だということになる、とギルバートは次のように述べる。

かくして、教会の權力は二重のものとされたのであります。すなわち、一方では天上の王に奉仕し、他方では地上のプリンケプス〔君侯〕に王達に属するものを提供するというように。一方で神から授けられた權力は司祭達を神の僕とし、他方で王から受け取った權力は司祭達を伯あるいはバロンとするのであります。⁽⁸⁷⁾

したがって、人法に基づいて教会のものとなった土地に関して争いが生じた場合には、判決は王のもとで下されるべきである。この場合、子である王が、父である司祭に対して判決を下していることになるが、それは驚くには値しないことだと述べられている。⁽⁸⁸⁾

以上のことから、ギルバートは、裁判管轄權に関する教会權力と世俗權力との關係について、どのように考えているといえるのか。彼は、二つの權力のそれぞれの職分と裁判管轄權とを結びつけて考えており、教会權力に属するものに祭司は裁判管轄權を有しており、世俗權力に属するものに王は裁判管轄權を有していると捉えているものと思われる。トマスもおそらくここまでは同じ考えであろう。なぜなら、トマスの議論において、教会權力に属す

るものを王は奪ってはならず、聖職者を裁くことは教会権力に属する事柄であつて、王が奪ってはならないと、教会権力に属するものにおける世俗権力の従属性は論じられているからである。しかし、注意するべきは、トマスの議論では、世俗権力に属するものにおける教会権力の従属性は強調されていない。換言するなら、教会権力と世俗権力との相互性は重要視されていない。これに対して、ギルバートの議論では、言わば、祭司に属するものにおいては王が従うことがあるのと同様に、王に属するものにおいては祭司が従うこともあるというような、相互性が重要視されている。例えば、「二 ロンドン司教ギルバート・フォリオットの両剣論」の冒頭で引用した部分に、「その両方の権力のいずれもが…ある点では他方から判決を下され得る」、そして「相互に自らに判決を下し、また自らによって判決を下される王達と司祭達のこのような相互関係」という表現があつたことを改めて想起すればよいだろう。では、ギルバートが考える、王に属するものにおいて祭司が従う場合とはどのような場合なのだろうか。「マルチプリケム・ノービース」書翰から言えることとして、それは少なくとも人法に基づいて教会のものとなつた土地（封）の場合だということになるう。

裁判管轄権に関する教会権力と世俗権力との相互性ないし協調的相互関係を強調する以上のようなギルバートの議論は、彼の聖俗相互協調型の両剣論を前提としなければ出てこない議論であらう。

三 トマスとギルバートの平和観

教会権力と世俗権力の関係はどうあるべきか、そして裁判管轄権に関して教会権力と世俗権力の関係はどうあるべきかという問題について、トマスとギルバートの考え方が異なることを、以上から確認することができたが、彼らは、あるべき秩序の実現、すなわち「平和」の実現については、どのように考えていたのだろうか。

トマスは、「フラテルニターティス・ヴェストレ」書翰⁽⁹⁰⁾の中で、国王を「教会の自由」の破壊者だと見なして非難しており、ギルバートをはじめとする司教達はそのような王の敵対者であらねばならないと述べている。司教達の職務は、「教会の自由」を守ることであり、その職務に忠実であるなら、「平和が一層速やかにやってくるし、教会の自由が一層豊かになる」とトマスは述べている。また、同書翰の別の箇所でも、「平和をつくる」と「教会の自由を守る」ことをトマスは並置している。ここからは、トマスが、「平和」と「教会の自由」を同義と見なしていることが分かる。したがって、前稿においても簡潔に指摘したように、トマスにとっての「平和」とはあくまで教会内部におけるそれであったということになる。

他方、ギルバートはどのように考えているのか。「ムルティプリケム・ノービース」書翰⁽⁹⁴⁾の中で「教会の自由」が語られることはあるが、それは「平和」と結びつけて語られてはいない。同書翰において、「平和」は、むしろ教会権力と世俗権力の関係や、教会と王国の関係と結びつけて論じられている。

私の敬虔なる王（ヘンリ）によって王国の統治が開始されてから、かの日まで：確かに聖なる教会は確たる平和によって栄えておりました。：善き支配者の下で全世界はきわめて快適に栄えておりました。王権は教権に対して忠実な恭順を敬虔に示し、また〔他方〕王のインペリウムはすべての善きことに向けて、教権によってきわめて堅固に支えられていたのであります。忠実な恭順によって主たるイエスに仕える二つの剣が、教会において行使されていきました。この二つの剣は、互いにそっぽを向いて立つことなく、また逆の方向を向いて互いに敵対することはありませんでした。人民は一つであり、聖書に書かれているように同じ言葉を使っていました。罪を追及するよう努め、悪徳が力強く根絶されることを喜んでおりました。このような平

和は王国と教会のものであり、王国と教会は互いの恩寵によって守られ、一致した意思によって結ばれておりました。⁽⁹⁵⁾

この引用部分の直後で、ギルバートは、トマスが大司教に昇進した時に混乱が訪れたと述べている。そしてこの混乱が「平和へと引き戻される」ことを、書翰の最後で切に願っている。⁽⁹⁶⁾ギルバートが願う、その「平和」とは、トマスの考える「平和」とは異なり、教会と王国との、あるいは教会権力と国王権力との相互の協調関係によってもたらされる「平和」だということになる。

四 教皇アレクサンデル三世の両剣論？

ベケット論争当時に教皇だったアレクサンデル三世は、教会権力と世俗権力との関係をどのように考えていたのだろうか。最後に、この点を確認しておきたい。

教皇アレクサンデル三世となるロランドウス・バンディネリは、教会法学者ロランドウスと同一人物であると見なされていたことがあるが、今日では両者は同一人物ではないことが明らかにされている。⁽⁹⁷⁾したがって、教会法学者ロランドウスの著作等の中にアレクサンデル三世の考えを見出そうとすることは、もはやできない。

どのような史料を分析した結果なのかは明確ではないが、スマーリーは、「アレクサンデル三世は、王権(regnum)に対する教権(sacerdotium)の優位についての極端な理論を主張してもいなければ、否定してもしない」と述べている。⁽⁹⁸⁾また、ダガンは、「アレクサンデル〔三世〕は、ヘンリ〔二世〕の脅迫とベケットの訴えとのバランスをとり、両者への誠実さと敬意を保ちながら、原理と妥協との間の困難で微妙な小道を歩まねばならな

かった⁽⁹⁹⁾と述べている。さらに、ロビンソンは、教皇選挙が行なわれた一一五九年から続く「シスマの期間、攻撃を受けやすく財政にも苦しむアレクサンデル三世」は、世俗の事柄における教皇の首位権や、従順でない王を廃位する教皇の権利を主張する立場にはなかった⁽¹⁰⁰⁾と述べている。フランスなどに亡命したり、対立教皇や皇帝とも対峙したりして、政治的にも微妙な立場にあったアレクサンデル三世は、自らの考えを明確にしなかった、あるいは少なくともグレゴリウス七世が主張したような両剣論とか教会優位型の両剣論とかを唱えることはなかったと考えられている。

確かに、一一六六年にアレクサンデル三世からヘンリ二世に対して送られた「エトシ・キルカ・ノス⁽¹⁰¹⁾」という「危機の期間に教皇から国王へ宛てられた書翰がほとんどない中での一通の書翰」⁽¹⁰²⁾には、教会権力（裁判権）と世俗権力（裁判権）の關係に触れてある部分があるが、アレクサンデル三世が教会権力と世俗権力との關係をどのように考えているかは明瞭ではない。

神により僕の中の僕である司教アレクサンデルは、イングランド人の名高き王たるヘンリに対して、挨拶と使徒の祝福とを「送ります」。私には、そしてあなたの母である聖なる教会には、あなたによる子としての献身が幾分冷めたものであったと思われるとしても、しかし、あなたに対する或いはあなたの指揮に委ねられた王国に対する父としての愛情を、いかなる時も私たちは捨て去ることはありませんでした。したがってあなたは、敵の接吻よりも味方の鞭打ちの方がよいということに注意深く気づいた上で、生活や衣服について聖職者が俗人から区別されるように、聖職者の裁判は俗人の裁判とは完全に異なるものであると確証されていることについて真摯に考えかつ留意するべきです。それゆえに、あなたがもし、正しくない秩序によっ

てそのことをゆがめるなら、そしてイエス・キリストに属するところのあなたの権力を自らのものとし、あなたの望みに従って教会とキリストの貧者を圧迫するために新しい法を定め、その上、あなたが祖父の〔慣習〕と称するところの慣習〔クラレンドン法〕をあなたが導入するなら、あなた自身は、間違いなく、逃れることのできない最後の審判において同じような方法で裁かれることでありましょう、あなたが計ったのと同じ程度のことあなたがあなたに返されることでしょう。⁽¹⁰⁾…。

本書翰では、聖職者の裁判と俗人の裁判が異なるものとして区別されねばならないと述べられており、これはクラレンドン法第三条を念頭に置いた発言であろう。その後、「イエス・キリストに属するところのあなたの権力」と述べてある部分があり、国王権力がイエス・キリストに属すると考えられているが、教会権力と世俗権力という二つの権力がともにイエス・キリストに由来すると述べられているわけではないため、教会権力と世俗権力が並置されているとはいえない。世俗権力者の権力はもとを辿ればイエス・キリストに由来するものだという一般論を述べ、それを我がものとしてはならないと国王に警告しているといえよう。教会権力と世俗権力との関係をアレクサンデル三世がどのように考えているか、はっきりとはしない。

おわりに

以上、教会権力と国王権力との争いであると表現することもできるベケット論争における大司教側と国王側の対

立点を、トマスとギルバートという論争当事者に着目して、両剣論という観点から、検討を加えた。

トマスとギルバートの書翰を分析した結果、彼らには、教会権力と世俗権力の関係をいかに考えるかについて違いがあることが判明した。また、その考えの違いは、二つの権力の裁判管轄権に関する考えの違いや、あるべき秩序、すなわち「平和」についての考えの違いとも密接に関係していることが明らかになった。

トマスは、世俗権力に対する教会権力の優位性を説く教会優位型両剣論を主張している。また、彼は、教会権力と世俗権力がそれぞれの職分を持つているということは認めているとしても、その職分についての議論の中で強調していることは、教会権力に属するものを世俗権力が自分のものであると主張したり、教会権力に属する権利を世俗権力が奪ったりしてはならないということである。裁判管轄権に関する教会権力と世俗権力の議論において彼が強調していることも、聖職者を裁くことは、換言するなら、聖職者を被告とする事件は、教会権力の優位性の故に、そして教会権力に属するものを奪うことになるが故に、国王の裁判管轄権には含まれないということである。このように、トマスの議論では、裁判管轄権に関して、教会権力に属するものにおける世俗権力の従属性については考えられているが、世俗権力に属するものにおける教会権力の従属性については考えられていない。つまり、裁判管轄権について、教会権力と世俗権力の相互性は議論されていない。このような考え方は、トマスが考える「平和」の考え方と通底するものがある。トマスが考える「平和」は「教会の自由」と同義のものであり、あくまで教会内部におけるそれであったということができるからである。

他方、ギルバートは、教会権力と世俗権力の並置性と相互協調性を強調する聖俗相互協調型両剣論を主張している。彼は、教会権力と世俗権力がそれぞれの職分を持つていると考え、それぞれの権力に属するものにおいては、一方は他方に従うことを当然視している。裁判管轄権についても、それぞれの権力に属するものにおいて、一方は

他方に従うとされており、教会権力に属するものにおける世俗権力の従属性と、世俗権力に属するものにおける教会権力の従属性が等しく取りあげてある。このように教会権力と世俗権力との相互性ないし協調的相互関係を強調する考え方は、彼が考える「平和」の考え方にも通じる。ギルバートにとつての「平和」とは、教会権力と世俗権力との相互の協調関係によって実現されるものであるからである。ギルバートが、教会権力と世俗権力との相互の協調関係を一貫して考えていたことは明らかであり、両剣論の観点からは、この点がトマスとの対立点だったということができよう。

(1) 'Two Swords, Doctrine of the', in *The Oxford Dictionary of the Middle Ages*, ed. R. E. Bjork, Oxford, 2010, vol.4, p.1661.

(2) 例えば、和田昌衛「エクストラヴァガンテス・コンムーネス」久保正幡先生還暦記念出版準備会編『西洋法制史料選Ⅱ 中世』創文社、一九七八、三三八―三四五頁、渕倫彦「第十二・三世紀ヨーロッパにおける両剣論——その理論と現実——」『宗教法』創刊号、一九八三年（以下、渕「両剣論」と略記）、一六四―一九〇頁、渕倫彦「カノン法」木村尚三郎他編『中世史講座 4 中世の法と権力』学生社、一九八五年、四一五―四三二頁、柴田平三郎「〈血の滴る剣〉——ソールズベリのジョンにおける『教会と国家』——」『獨協法学』第四六号、一九九八年（同『中世の春——ソールズベリのジョンの思想世界——』慶應義塾大学出版会、二〇〇二年、第七章所収）、一―四五頁、天野和夫「ジョン・オヴ・ソールズベリの抵抗権論」『立命館法学』第四三号、一九六二年、二六五―二九一頁がある。

(3) J.P.Migne ed., *Patrologiae cursus completus, Series latina*, 59 (以下、PLと略記), Paris, 1847, Gelasius I, Epistola VIII, col.42A: Duo quippe sunt, imperator Auguste, quibus principaliter mundus hic regitur: auctoritas sacra

[sacrata] pontificum, et regalis potestas.

- (4) B. Smalley, *The Becket Conflict and the Schools: A Study of Intellectuals in Politics*, Oxford, 1973, p.27; 訳「両剣論」一六四—五頁。

- (5) I.S. Robinson, 'Regnum and sacerdotium' in his 'Church and Papacy' in *The Cambridge History of Medieval Political Thought c. 350-c. 1450*, ed. J. H. Burns, Cambridge, 1988, pp.288-305; I. S. Robinson, *The Papacy 1073-1198 Continuity and Innovation*, Cambridge, 1990 (以下「Robinson, *The Papacy*」略記), pp.295-300.

- (6) ベケット論争については、さしあたり、佐藤伊久男「カンタベリー大司教トマス＝ベケットの闘い——十二世紀の国制と教会の側面——」『西洋史研究』新輯一三号、一九八四年（同『中世イングランドにおける諸社会の構造と展開』創文社、二〇一二年、第一章所収）（以下、佐藤「トマス＝ベケット」と略記）、一—二五頁を参照。

- (7) 本稿での考察に用いる書翰は、後掲の表に整理しておいた。書翰を取り上げる際には、カタカナ表記によるインキピト（挨拶文の後の文頭の二語ないし三語）で表示し、煩を厭わず、表中のNoを註に記した。書翰の刊本については、表で確認できるようにしておいた。本稿での書翰の分析には、表の註に示しておいた三つの刊本を主として用いる。註における書翰の原文は、最新の刊本であるCTBに掲載がない書翰の場合は、GFLないしMTBによるものとした。

- (8) 表の[14]を参照。

- (9) 表の[17]を参照。

- (10) W. L. Warren, *Henry II*, new edition and new foreword, New Haven and London, 2000, p.517.

- (11) A. Morey and C. N. L. Brooke, *Gilbert Foliot and his Letters*, Cambridge, 1965 (以下「GFL」略記), p.1; 佐藤「トマス＝ベケット」一頁を参照。他に、D. Knowles, *The Episcopal Colleagues of Archbishop Thomas Becket*,

Cambridge, 1951 (『*EC*』略記), pp. 37ff.を参照。

(12) 表の[22]を参照。直江真一・苑田亜矢「マルチプリケム・ノービース(翻訳と解説)——ロンドン司教ギルバート・フォリオットの一書翰——」『法政研究』第六六卷第三号、一九九九年(以下、直江・苑田「マルチプリケム・ノービース」と略記)、一〇八三—一二九頁に翻訳と解説がある。

(13) 「フラテルニタティス・ヴェストレ」書翰については、表の[21]を参照。苑田亜矢・直江真一「フラテルニタティス・ヴェストレ(翻訳と解説)——カンタベリ大司教トマス・ベケットの書翰——」『法学研究(北海学園大学)』第四〇巻第二号、二〇〇四年(以下、直江・苑田「フラテルニタティス・ヴェストレ」と略記)、三九九—四四一頁に翻訳と解説がある。本書翰は、カンタベリ大司教管区の全司教と全聖職者を名宛人としているが、その内容から、事実上ギルバートに宛てられたものであると判断できる。

(14) 一一六二年五月二三日選出、同年六月三日聖別。

(15) それぞれ表の[22]と[23]を参照。GF, pp.149-151も参照。「マルチプリケム・ノービース」書翰におけるギルバートの反論については、直江・苑田「マルチプリケム・ノービース」、一一〇一頁を参照。

(16) 表の[20]を参照。苑田亜矢・直江真一「ミランドウム・エト・ヴェヘメンテル(翻訳と解説)——カンタベリ大司教トマス・ベケットの書翰——」『法学研究(北海学園大学)』第四二巻第二号、二〇〇六年(以下、苑田・直江「ミランドウム・エト・ヴェヘメンテル」と略記)、四七九—四九四頁に翻訳と解説がある。トマスの支持者だったジョン・オヴ・ソールズベリも一一六六年のエクセタ司教宛書翰「ムルタ・クイデム」(表の[12])で非難している。「ムルタ・クイデム」は、W. J. Millor and C. N. L. Brooke eds. and trans. *The Letters of John of Salisbury*, vol. II, Oxford, 1979, no.174, pp. 138-53にも収録されている。EC, pp.44f.; GF, pp.31, 94を参照。

- (17) 一一六三年三月六日。
- (18) 一一六三年六月九日頃の教皇アレクサンデル三世のトマス宛書翰「ドウム・イン・セレブラチオーネ」(表の[5] は、トゥールーズ教会会議(一一六三年五月一九日より開催)において、トマスがギルバートに対して忠誠の誓いを求めていることを取り上げ、司教として二度目となるカンタベリー教会への忠誠の誓いは、ギルバートに要求されるべきではないと述べている。GF, p.6を参照。
- (19) A. Duggan, *The Correspondence of Thomas Becket Archbishop of Canterbury 1162-1170*, 2 vols., Oxford, 2000 (以下、CTBを略記), no.18, p.44 n.6を参照。
- (20) 教皇書翰は「エクス・リテリス」(表の[1]、トマス書翰は「クアム・シット」(同[2]、国王書翰は「メンティス・ヴェストレ」(同[3] である。
- (21) 表の[4]の「ノリ・グラヴィテル」書翰を参照。
- (22) バローは、トマスとギルバートの関係は、少なくとも一一六三年までは良好だったとしている。F. Barlow, *Thomas Becket*, California, 1986, p.35.
- (23) 一一六四年一月二九日に、トマスはフランスのサンスの教皇庁に到着した。トマスの主な動向については、A. Duggan, *Thomas Becket*, London, 2004, pp.317-19が便利である。
- (24) 表の[6]の「ドケット・ノス」書翰を参照。
- (25) CTB, nos. 12, 17.
- (26) 表の[7]の「アド・アウディエンティアム」書翰を参照。
- (27) ノーサムプトンでの事件については、さしあたり、苑田亜矢「一二世紀イングランドにおける教皇庁への上訴をめぐる

て——一六四年のクラレンドン法第八条および一七二年のアヴランシュの和約の再検討——」『法制史研究』五〇号、

二〇〇一年、二四九—五〇頁を参照。

(28) 表の[8]の「クオド・ミノル」書翰を参照。

(29) 表の[9]の「ア・メモリア・トゥア」書翰を参照。

(30) 表の[10]の「マンダートゥム・ヴェストルム」書翰を参照。

(31) このことは、一六四年のクラレンドン法第四条と第八条が念頭に置かれているものと考えられる。

(32) 表の[11]を参照。

(33) *CTB*, no.65, p.251 n.1. 書翰の語調から、この書翰が一六六年初めに発せられたものとダガンは判断している。

(34) 表の[15]の「セレブレ・プロヴェルビウム」書翰を参照。聖務停止をソールズベリ司教ジョスリンに告知している。

(35) トマスを差出人とする書翰として、「フラトレス・メイ」書翰(表の[16])の他、教皇宛書翰(*CTB*, no.79)‘三人の枢機

卿宛書翰(*CTB*, no.80)‘ルーアン大司教宛書翰(*CTB*, no.81)がある。

(36) 前掲註(35)を参照。

(37) 例えば、表の[18]の「ヴェストラム・パテル」書翰(*GFL*, no.166, p.220) および同[19]の「クエ・ヴェストロ・パテル」

書翰(*CTB*, no.93, p.374)で「脅迫」の語が用いられている。これらの書翰は、ギルバートが書いたとされている。*GFL*,

p.218 n.1 and p.219 n.4.

(38) 表の[14]を参照。

(39) *CTB*, no.74, p.296: non habetis episcopis precipere, absolueri aliquem uel excommunicare, trahere clericos ad secularia examina, iudicare de ecclesiis uel decimis, interdicere episcopis ne tractent causas de transgressione

fidei uel iuramenti, et multa in hunc modum, que scripta sunt inter consuetudines nostras, quas dicitis auitas.

(40) *CTB*, no.74, p.298: diuinam seueritatem et ultionem sentietis.

(41) 表の[19]を参照。

(42) 表の[21]を参照。ギルバート達による上訴の適法性の問題に関するトマスの議論については、直江・苑田「フラテルニターティス・ヴェストレ」四〇三頁以下に整理してある。

(43) 表の[16]および前掲註(35)(36)を参照。

(44) *CTB*, no.78, pp. 308, 310.

(45) *CTB*, no.78, p.310: Quod non appelletur ad sedem apostolicam super aliqua causa nisi licentia regis; Quod non liceat archiepiscopo uel episcopo exire de regno, et uenire ad uocationem domini pape, sine licentia regis; Quod non liceat episcopo excommunicare aliquem qui tenet de rege in capite sine licentia regis, uel terram ipsius uel officialium suorum sub interdicto ponere; Quod non liceat episcopo cohercere aliquem de periurio uel fide lesa; Quod clerici trahantur ad secularia iudicia; Quod laici, seu rex, seu alii, tractent causas de ecclesiis uel decimis: et alia in hunc modum.

(46) ちなみに、トマスが大陸へ亡命した後、彼を通じてクラレンドン法を提示された教皇アレクサンデル三世が否認したと伝えられている条項は、トマス伝によつて異なる。いずれのトマス伝においても、教皇が否認したとされている条項は、第一条、第三条、第四条、第七条、第八条、第一五条である。D. Whitelock, M. Brett and C. N. L. Brooke eds., *Councils & Synods with other Documents relating to the English Church*, I, Pt. II 1066-1204, Oxford, 1981, p.855 n.1. 佐藤「トマス・ベケット」九頁および一二頁註(18)も参照。

(47) 前掲註(39)を参照。

(48) 表の[2]を参照。

(49) *CTB*, no.109, p.508 (直江・苑田「ムルティプリケム・ノース」 110頁) : quarum [dignitatum regiarum] observatio cum a vobis et a suffraganeis ecclesie vestre exigeretur episcopis, eo quod in quibusdam earum ecclesie Dei videbatur libertas opprimi, assensum dare recusavimus, preterquam his que salvo honore Dei et ordine nostro poterant observari.

(50) *PL*, Gelasius I, Epistola VIII, col.42A: Duo quippe sunt, imperator Auguste, quibus principaliter mundus hic regitur: auctoritas sacra [sacrata] pontificum, et regalis potestas. In quibus tanto gravius est pondus sacerdotum, quanto etiam pro ipsis regibus Domino in divino reddituri sunt examine rationem. Nosti etenim, fili clementissime, quod licet praesideas humano generi dignitate, rerum tamen praesulibus divinarum devotus colla submititis, atque ab eis causas tuae salutis expetis [expectas], inque sumendis coelestibus sacramentis, eisque, ut competit, disponendis, subdi te debere cognoscis religionis ordine potius quam praeesse.

(51) A. Thiel ed., *Epistolae Romanorum Pontificum Genuinae*, I, Braunsberg, 1868, Gelasius I, Tractatus IV.2, p.567 (Robinson, 'regnum and sacerdotium', p.289 n. 273) : Christus...actionibus propriis dignitatibusque distinctis officia potestatis utriusque discrevit, ut et christiani imperatores pro aeterna vita pontificibus indigerent et pontifices pro temporalium cursu rerum imperialibus dispositionibus uterentur.

(52) Regum et principum patres et magistri sacerdotes censentur.

(53) D.96 c.9: Quis dubitet sacerdotes Christi regum et principum omniumque fidelium patres et magistros

- censeri? Nonne miserabilis insaniae esse cognoscitur, si filius patrem, discipulus magistrum sibi conetur subingere, et iniquis obligationibus illum suae potestati subicere, a quo credit non solum in terra, sed etiam in celis se ligari posse et solui?
- (14) Auctoritas sacra Pontificum et regalis potestas huius mundi gubernacula regit.
- (15) D.96 c.10: Duo sunt quippe, imperator auguste, quibus principaliter hic mundus regitur: auctoritas sacra Pontificum, et regalis potestas. In quibus tanto grauius est pondus sacerdotum, quanto etiam pro ipsis regibus hominum in diuino sunt reddituri examine rationem. *Et post pauca*: §1. Nosti itaque inter hec ex illorum te pendere iudicio, non illos ad tuam posse redigi voluntatem.
- (16) 改変ヴァージョンの挿入部分の表現は「ゲラシウス書翰」との間に「僅かに異同がある」。
- (17) *CTB*, p.438 n.29; Robinson, *The Papacy*, pp.297, 299.
- (18) Imperatores debent Pontificibus subesse, non preesse.
- (19) D.96 c.11: ... Non a legibus publicis, non a potestatibus seculi, sed a pontificibus et sacerdotibus, omnipotens Deus Christianae religionis clericos et sacerdotes uoluit ordinari, et discuti et recipi de errore remeantes. Imperatores Christiani subdere debent executiones suas ecclesiasticis prescribibus, non preferre.
- (20) バレアにひいては「さしあたり」苑田亜矢「法の様々な区分についての論考（翻訳と解説）」——中世教会法学のアンゲロ・ノルマン学派による「作品」——『熊本法学』第111号、2010年、八四頁を参照。
- (21) D.96 c.12: Numquam de pontificibus nisi ecclesiam iudicasse, non esse humanarum legum de talibus ferre sententiam absque ecclesiae principaliter constitutis pontificibus; obsequi solere principes Christianos decretis

ecclesiae, non suam preponere potestatem: episcopis caput subdere principem solitum, non de eorum capitibus iudicare.

(32) C.2 q.7 dictum post c.41 : ... Sed notandum est, quod duae sunt personae, quibus mundus iste regitur, regalis uidelicet et sacerdotalis. Sicut reges presunt in causis seculi, ita sacerdotes in causis Dei. Regum est corporalem interrogare penam, sacerdotum spirituales inferre uindictam. David ergo, etsi ex regali unctione sacerdotibus et prophetis preerat in causis seculi, tamen suberat eis in causis Dei. Unde reges a prophetis et sacerdotibus ungebantur et eorum oblatione peccata regum expiabantur. ...

(33) Imperiali iudicio Apostolicus emendare promittit, si quid erga subditos iniuste commisit.

(34) C.2 q.7 c.41: Nos, si incompetenter aliquid egimus, et in subditiis iustae legis tramitem non conseruauimus, nestro ac missorum nestrorum cuncta uolumus emendare iudicio...

(35) 表の[14]を参照。

(36) *CTB*, no.74, p.296: Ecclesia enim Dei in duobus constat ordinibus, clero et populo. In clero sunt apostoli, apostolici uiri, episcopi, et ceteri doctores ecclesie, quibus commissa est cura et regimen ipsius ecclesie, qui tractare habent negocia ecclesiastica, ut totum reducant ad salutem animarum. In populo sunt reges, principes, duces, comites, et alie potestates, qui secularia habent tractare negocia, ut totum reducant ad pacem et unitatem ecclesie. Et quia certum est reges potestatem suam accipere ab ecclesia, non ipsam ab illis, sed a Christo...

(37) 表の[2]を参照。

(8) *CTB*, no.95, p.400 (苑田・直江「フランチルニターナス・サハス・ストーン」西一十頁): Nolite, fratres, nolite iura regi et ecclesie confundere. Discrete quidem sunt potestates iste, quarum una uim et potestatem sortitur ex alia.

(9) 表の[17]を参照。

(10) *CTB*, no.82, p.336: Ad sacerdotes, rex dilectissime, suos uoluit Deus que ecclesie sue sunt disponenda pertinere, non ad potestates seculi, quas, si fideles sunt, ecclesie sue sacerdotibus uoluit esse subiectas. Non uobis ergo uendicetis ius alienum et ministerium quod alteri deputatum est; neque contra Eum contendatis, a quo omnia sunt constituta, ne contra Illius beneficia pugnare uideamini, a quo uestram consecutus estis potestatem.

(11) *CTB*, no.82, p.336: Non a legibus publicis, non a seculi potestatibus, sed a pontificibus et sacerdotibus, omnipotens Deus Christiane religionis clericos uoluit ordinari et discuti. Christiani reges subdere debent executiones suas ecclesiasticis presulibus, non preferre. 下の部分が D.96 c.11 からの引用である。僅かだが異同がある。

(12) *CTB*, no.82, p.336: Scriptum quippe est, 'Nunquam de sacerdotibus nisi ecclesiam iudicare debere; nec esse humanarum legum de talibus ferre sententiam; obsequi solere principes Christianos statutis ecclesie, non suam potestatem preponere; episcopis caput principes subdere, non de episcopis iudicare.' 下の部分が D.96 c.12 からの引用である。僅かだが異同がある。

(13) *CTB*, no.82, pp.336, 338: 'Duo quippe sunt quibus principaliter regitur mundus, auctoritas sacra pontificum et regalis potestas. In quibus tanto grauius est pondus sacerdotum, quanto et de ipsis regibus in diuino sunt

redditori examine rationem. Nosse certe debuistis ex illorum uos debere pendere iudicio, non illos ad uestram posse redigi uoluntatem.' の語句は D.96 c.10 からの引用である。僅かだが異同がある。

(74) 表の[16]を参照。

(75) *CTB*, no.78, p.310: Quis enim dubitat sacerdotes Christi regum et principum omniumque fidelium patres et magistros censerī? Nonne miserabilis insanie esse cognoscitur, si filius patrem, discipulus magistrum, sibi conetur subiugare, et iniquis obligationibus illum potestati sue subicere, a quo credit se non solum in terra, sed etiam in celis ligari posse et solui?

(76) 表の[20]を参照。

(77) *CTB*, no.96, pp.436, 438 (苑田・直江「マヒンデル・ヤ・ヤ・ヤヘクメンテル」四九〇頁): Sciat ergo et intelligat te intimante dominus meus, quia qui dominatur in regno hominum sed et angelorum, duas sub se potestates ordinauit, principes et sacerdotes, unam terrenam, alteram spiritualem; unam ministrantem, alteram preminentem; unam cui potenciam concessit, alteram cui reuerentiam exhiberi uoluit. Qui uero his uel illis de suo iure subtrahit, Dei ordinationi resistit.

(78) 表の[20]を参照。

(79) *CTB*, no.96, p.438 (苑田・直江「マヒンデル・ヤ・ヤ・ヤヘクメンテル」四九〇頁): Nec presumat dominus noster iudices suos uelle iudicare. Terrenis enim potestatibus non sunt commissae clauēs regni celorum, sed sacerdotio.

(80) *CTB*, no.96, p.438 (苑田・直江「マヒンデル・ヤ・ヤ・ヤヘクメンテル」四九〇—九一頁): Vos dii estis, a uero

Deo constitui. Itē et inter uos causas uestras disponite, quia dignum non est ut nos homines iudicemus deos.¹
 への部分が C.11 q.1 c.41 からの引用である。

- (8) *CTB*, no.96, p.438 (苑田・直江「マリンダム・エト・ウエクメンテル」四九一頁) : O magnum imperatorem! O discrete regnantem in terra, que aliena sunt non usurpantem, et regnum eternum in celo promerentem!

(8) 表の[2]を参照。

- (8) *CTB*, no.109, p.520 (直江・苑田「マルチブリケム・ノーゴース」一一一[三]頁) : Cum sit igitur a Deo gemina potestas, hinc sacerdotalis, hinc regia, utranque secundum quid preesse alteri, et ab altera secundum quid posse iudicari, patrum auctoritate confirmant; ut sit regum et presulum uicissitudo hec qua se uicissim iudicant et iudicantur a se, forte quoddam caritatis uinculum, reuerentie debitum, et utrique necessitudo quedam seruande, pacis ad alterum.

- (8) *CTB*, no.109, pp.520, 522 (直江・苑田「マルチブリケム・ノーゴース」一一一[三]頁) : Hec et his altiora considerans, regem quasi precellentem, prout monet apostolus, honorastis, et eius parendo sententie recte iudicem agnouistis, sibi que seruando quod suum est, ipsum in his que ad Deum sunt, uestre parere subtilitati prudenter et prouide monuistis.

(8) 前掲註(6)を参照。

- (8) *CTB*, no.109, p.516 (直江・苑田「マルチブリケム・ノーゴース」一一一〇—一一一頁) : Si uobis mens ista est, discretioni uestre quamplurimum in hoc consenti opinio, ut ob sacramenti reuerentiam regem estimet non omnes, sed, quas distinguunt, ecclesie et personarum ecclesie causas oportere discutere, et regie iurisdictionis

examine terminare.

- (87) *CTB*, no.109, p.520 (苑田・直江「マルチプリケム・ノービース」一一一二頁): Sic igitur ecclesie geminata potestas est, ut hinc regi celesti seruiat, hinc terreno principi quod ad eos spectat exhibeat; eiusque ministros efficit potestas hinc a Deo collata pontifices, hinc a rege suscepta comites aut barones.

- (88) トマスは、「フラテルニターティス・ヴェストレ」書翰において、「国王裁判所において、しかもとくにカンタベリ〔教会〕の属司教達によって、カンタベリ〔大司教〕が判決を下され、非難されゝるのを、かつて見たり聞いたたりした者が誰かいるではありませんか」(苑田・直江「フラテルニターティス・ヴェストレ」、四一四頁)と大司教が国王裁判所において、しかも属司教達によって裁かれることを問題としており、ギルバートは「マルチプリケム・ノービース」書翰において、この点に回答したものと思われる。なお、ギルバートは、「この権力は私達を王に義務づけるのであり、そのために私達は王から召集された時には援助を与え、あらゆる事件について個々に審理し、判決を下さねばならないのであります」とも書いており、大司教が何故に属司教によって裁かれるのかについても説明している(直江・苑田「マルチプリケム・ノービース」一一二三頁)

- (89) 表の[21]参照。

- (90) *CTB*, no.95, p.416 (苑田・直江「フラテルニターティス・ヴェストレ」、四二七頁): qui subuerit ecclesie libertatem; *CTB*, no.95, p.420 (「フラテルニターティス・ヴェストレ」四二九頁): eius [ecclesiae] libertatis subuersores.

- (91) *CTB*, no.95, p.424 (苑田・直江「フラテルニターティス・ヴェストレ」、四三一一頁): ... sit nobis pax celerior, et libertas amplior ecclesie.

- (92) 「実際、もし私が言ったことをあなた方が聞いたのであれば、平和をつくり教会の自由を守るための私達のあらゆる道に

において、主があなたと共におられ、そして私達全ての者と共におられるであらうことを、あなた方は知らねばなりません
 「フラテルニターティス・ヴェストレ」四一三頁」(CTB, no.95, p.394: *Revera, si me audieritis, sciote quoniam Dominus erit vobiscum, et cum omnibus nobis in cunctis uis nostris ad faciendam pacem, et deferendam ecclesie libertatem.*)

(93) 苑田・直江「フラテルニターティス・ヴェストレ」四〇六頁。

(94) 表の[22]を参照。

(95) CTB, no.109, p.506 (苑田・直江「マルチブリケム・ノーブリス」一一〇四—五頁): A pio rege nostro suscepto regni gubernaculo, ad illum usque diem ecclesia quidem sancta alta pace floruerat sub bono principe cuncta gaudebant, iocundissime letabantur uniuersa. Regnum sacerdotio deuotum sancte prestabat obsequium, et sacerdotio firmissime fulciebatur ad bonum omne regis imperium. Exercebantur in ecclesia gladii duo, deuoto Domino Iesu famulantes obsequio. Nec sibi stabant ex aduerso, nec tendentes in contraria, repugnabant alterutro. Vnus erat populus, et ut scriptum est unius labii, studens peccata persequi, gaudens uita fortiter eradicari. Hec regni fuit et ecclesie pax: alterna sic gratia fouebantur, et unanimi uoluntate iungebantur.

(96) 苑田・直江「マルチブリケム・ノーブリス」一一一一—一二頁を参照。

(97) J. T. Noonan, 'Who was Rolandus?' in *Law, Church and Society. Essays in Honor in Stephan Kutner* ed. K. Pennington and R. Somerville, Pennsylvania, 1977, pp.21-48.

(98) Smalley, *The Becket Conflict and the Schools*, p.238.

(99) CTB, p.xxii

(30) Robinson, *The Papacy*, p.484

(101) 表の[3]を参照。

(201) Warren, *Henry II*, p.528

(33) *MTB*, vol. VI, no.486, pp.553-4: Alexander episcopus, servus servorum Dei, Henrico, illustri Anglorum regi, salutem et apostolicam benedictionem. Esi circa nos, et matrem tuam, sacrosanctam ecclesiam, filialis in te devotio videatur aliquatenus tepuisse, paternum tamen affectum circa te vel regnum tuae gubernationi commissum nullo tempore deseruimus. Tua ergo serenitas, quod amici verbera potiora quam inimici oscula existant diligenter advertens, consideret studiosius et attendat, quod, sicut clerici a viris saecularibus vita et habitu distinguuntur, ita et iudicia clericorum a laicorum iudiciis diversa penitus comprobantur. Quare si ea ordine quo non decet pervertas, et quae Jesu Christi sunt tuae potestati usurpans, novas leges ad oppressionem ecclesiarum et Christi pauperum pro tuo beneplacito condas, consuetudines etiam quas avitas vocas inducas, tu ipse proculdubio in extremo examine, quod effugere non poteris, modo consimili iudicaberis, et eadem mensura qua mensus fueris remetietur tibi.

表 書翰一覧

No.	Incipit	発給年	発給者	受給者	MTB (no.)	GFL (no.)	CTB (no.)
[1]	Ex litteris	1163年3月19日	Pope Alexander III	Bishop Gilbert of London	18	141	—
[2]	Quam sit	1163年3月末ないし 4月	Archbishop Thomas of Canterbury	Bishop Gilbert of London	17	142	7
[3]	Mentis vestre	1163年3月末ないし 4月	King Henry II	Bishop Gilbert of London	16	143	—
[4]	Noli grauitur	1163年4月	Archbishop Thomas of Canterbury	Bishop Gilbert of London	19	144	8
[5]	Dum in celebratione	1163年6月9日頃	Pope Alexander III	Archbishop Thomas of Canterbury	67	—	11
[6]	Docet nos	1163-4年	Bishop Gilbert of London	Archbishop Thomas of Canterbury	40	148	22
[7]	Ad audientiam	1164年11月29日頃	Archbishop Thomas of Canterbury	Pope Alexander III	74	—	37
[8]	Quod minor	1164年11月-1165年8 月	Pope Alexander III	Archbishop Thomas of Canterbury	94	—	38
[9]	A memoria tua	1165年	Pope Alexander III	Bishop Gilbert of London	93	—	—
[10]	Mandatum uestrum	1165年7月末-8月	Bishop Gilbert of London	Pope Alexander III	108	155	—
[11]	Licet tibi	1166年初め	Archbishop Thomas of Canterbury	Bishop Gilbert of London	155	—	65
[12]	Multa quidem	1166年	John of Salisbury	Bishop Bartholomew of Exeter	252	—	—
[13]	Etsi circa nos	1166年	Pope Alexander III	King Henry II	486	—	—
[14]	Desiderio desideraui	1166年5月末-6月初め	Archbishop Thomas of Canterbury	King Henry II	154	—	74
[15]	Celebre prouerbium	1166年6月12日	Archbishop Thomas of Canterbury	Bishop Jocelin of Salisbury	199	—	76
[16]	Fratres mei	1166年6月12日	Archbishop Thomas of Canterbury	Bishop Gilbert of London and All bishops in the Province of Canterbury	198	—	78
[17]	Expectans expectaui	1166年6月12日より後	Archbishop Thomas of Canterbury	King Henry II	153	—	82
[18]	Vestram pater	1166年6月24日頃	All bishops and clergy in the Province of Canterbury (Gilbert)	Pope Alexander III	204	166	—
[19]	Que uestro pater	1166年6月24日頃	All bishops and clergy in the Province of Canterbury (Gilbert)	Archbishop Thomas of Canterbury	205	167	93
[20]	Mirandum et uehementer	1166年7月初め	Archbishop Thomas of Canterbury	Bishop Gilbert of London	224	—	96
[21]	Fraternitatis uestre	1166年7月初め	Archbishop Thomas of Canterbury	All bishops and clergy in the Province of Canterbury (Gilbert)	223	—	95
[22]	Multiplicem nobis	1166年後半	Bishop Gilbert of London	Archbishop Thomas of Canterbury	225	170	109
[23]	Vestre Domne	1173年5月	Bishop Gilbert of London	King Henry II	792	220	—

註

* MTB: J.C.Robertson and J.B.Sheppard eds., *Materials for the History of Thomas Becket*, 7 vols., Rolls Series, 67, 1875-85.

** GFL: Z.N.Brooke, A.Morey and C.N.L.Brooke eds., *The Letters and Charters of Gilbert Foliot*, Cambridge, 1967.

*** CTB: A.Duggan ed., *The Correspondence of Thomas Becket: Archbishop of Canterbury 1162-1170*, Oxford, 2 vols., 2000.